

【編集後記】「線状降水帯の予測」

今年も梅雨のシーズンに入った。水害の季節でもあり、熊本県の球磨川が氾濫した令和2年7月豪雨や倉敷市真備町が水没した平成30年西日本豪雨などは記憶に新しい。集中豪雨の多くは、線状降水帯の発生によるものと考えられている。線状降水帯は、積乱雲が次々と発生し、線状の降水域が長時間にわたって同じ場所に停滞するもので大雨災害をもたらす危険性が高い。気象庁は、今年度からその発生の事前予測と情報提供を開始すると発表した。気象衛星やレーダーなどによる観測強化と次世代スーパーコンピューターや「富岳」の活用による予測の強化に取り組み、段階的に精度を向上し、令和4年度は「九州北部」などの広域単位、6年度には県単位、11年度には市町村単位での予測をめざすという。予測が迅速で効果的な避難につながることを期待される。科学の進歩により防災気象情報はますます高度化していくだろう。それをいかに被害の防止・軽減につなげるか、行政、地域、住民の対応力が問われている。

地域防災に関する総合情報誌 **地域防災** 2022年6月号（通巻44号）

■発行日 令和4年6月15日

■発行所 一般財団法人日本防火・防災協会

■編集発行人 高尾 和彦

〒105-0021 東京都港区東新橋1-1-19（ヤクルトビル内）

TEL 03 (6280) 6904 FAX 03 (6205) 7851

URL <https://www.n-bouka.or.jp>

■編集協力 近代消防社